Centimetres
KODAK Color Control Patches ©The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

E 5
2219
3

日本山海名産圖會巻之三

目録

漁捕品

○伊勢鰕　長鮑　附　真珠

○伊勢海鰕

○丹後鰤　追網　立網　附　他国鰤

○平戸鮪　冬網

○讃岐鰆　流網

日本山海名産圖會
2219
巻 5-3

○若狭鯛　同鰈　并　塩蔵風乾　附　他國鯛

○讃刃榎股攘網　同　五智網

○能登鯖　同　他刃釣舟

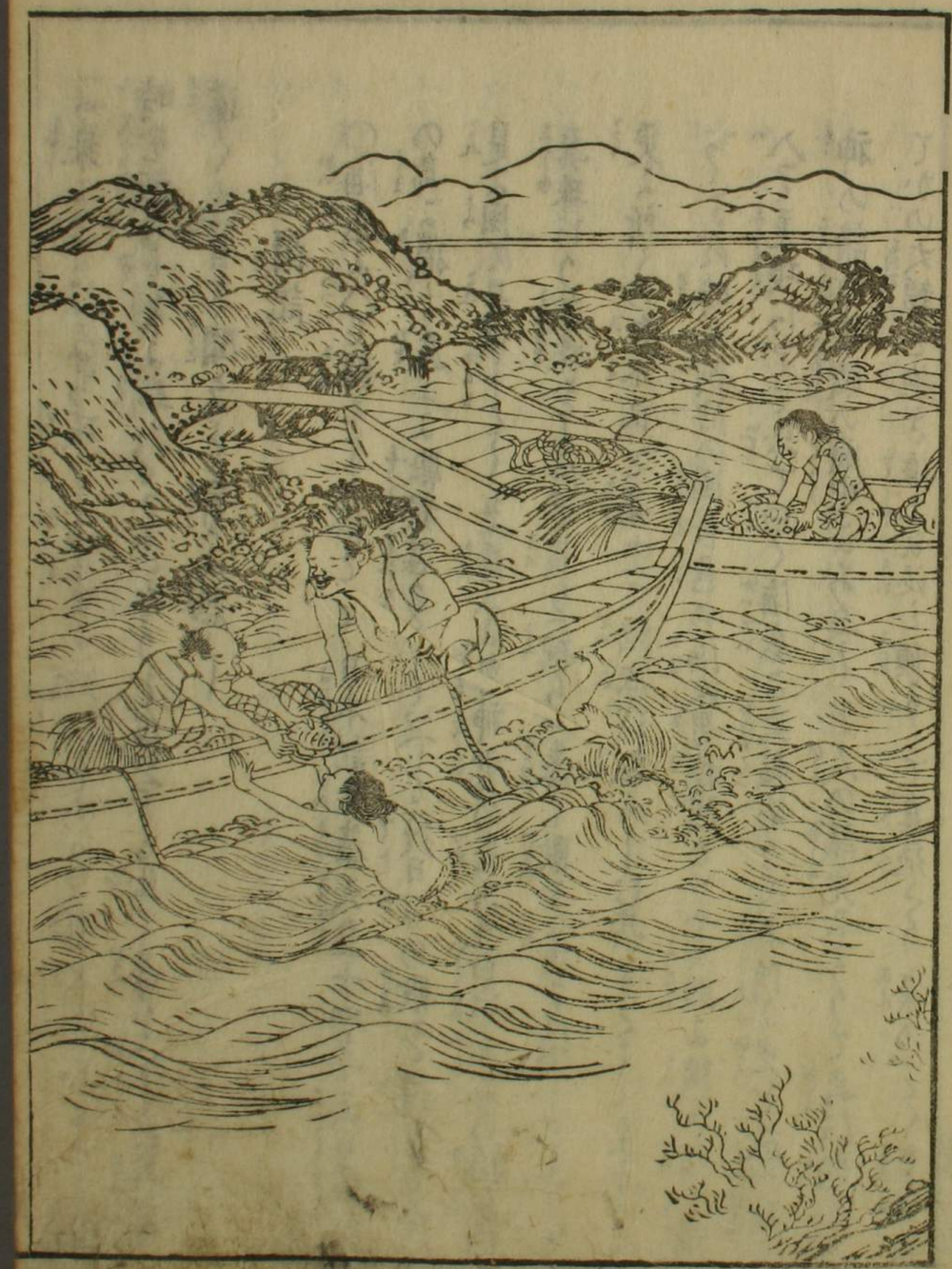
○廣島牡蠣　同　畜養法　種類

漁捕品

○鰒　長鮑制　附　真珠

或云ひらくしひ石決明と字ヨミ鰒ハトコブシ

伊勢國　和具浦　御座浦　大野浦の三所より鰒を取り二見の浦北塔世と云所にて鮑を制をなす鰒を取るは必女海人を以て是女は能く久しく呼吸を止めてたもてるゆ故なり　船にて沖ふかく出ふるかなたに親屬伐具して船を盪らせ縄を引せなどに海に入るに腰に小さき蒲簀を附て鰒三四つを納をこ大なるを得ていこつ許すくても浅め丁浅き所にては竿を入るくに附て泛む是を友竿といふ深き所にてはよりて腰に縄を附て泛んとする時是を動くに示せば船より引ひぐふなり若き者ハ五尋世以上八十尋十五尋迄限とも皆逆に入て立游ざし海底の岩に着たるとおこし箕をもたて不意



伊勢海老

に乗じてはるかに取て蒲簀に納むその息とそぐむること暫
時なり朝ゐるに馴たるごとなりとはいへども出て息を吹くに其聲
遠くも晉き聞えく實に悲しく

附記

○海底に入て鰒をとることは日本記允恭天皇十四年天皇陵路
の島に獵し給ふに獸類甚多しといへども終日一つの獸を得ることを
是に因て是試トとし給ふに忽神霊の告あり曰く赤石の海底に
真珠ありその珠をもとめて我を祠らば悉く獸を獲さんべしとさて
更に所くの白水郎を集めて海底を探らしむ其ときに至ることを
うることを時に阿波の國長邑の海人男狹磯といふ者腰に縄を附て踊
入て差項にして出て曰く海底に大鰒あり其所に光を放つ殆ど
神の請所其鰒の腹中にあるべしと人の議定まりて再び探き入
てかの大鰒を抱き浪上に泛こ頻りて息絶ぬ案のごく真珠排

乃子の如き物を腹中に得たり人々男狹磯が死を悲れこ葬りて墓を
築き尚今も存せりとぞ此時海の深さ六十尋ありて海人男海人
の業なるをば其勞れをひやられ侍る後世是を摸擬して箱崎の
玉とりとて謡曲に著作せしは此物語なるべし

○鰒は凡介中の長なり古くより是を美味とする物徑尺余ふるるの二三寸水中に
ひれを具の孤なるまま出ぬ抜出して以て弱占

○五畿内の俗是をアて貝といふは海人の取をのなれどなるべしアハビ
といふを偏に著て合ざる貝なれど合ぬ實といふ後るべし萬葉
十一に「伊波の間土のなされゆゑかぐてにあはびのかひの
かたなりひりて月七に「伊波の間の浦れあてれ高洋に鰒ふと
アて後ても忘れしけんスナ十七に　著石王ともかけり○雄貝
は狹く長し雌貝は円く短く肉多し但し九孔七孔のをの甚稀

○制長鮑　俗に鬢斗の字とかくは誤なり鬢斗は女工の具衣裳と鬢
伸もその器なり此のしのこと
先貝の大小に隨ひ剥べき數多を量て横に數くに剥うけ置て

薄き丹うて薄くくと剥にう迴し〜切ふ事圓のごく豐後豊島薦
よ敷さ並らくて乾ぶ故よ各筵目茂帯たり本末ひるふい束ぬろ為
なりさて是とノシといふる昔ハ打鮑とて打栗のごく打延〜裁
截などせ〜故よノシといひ又干ひもびる
○又干鮑打つ〜びともよ往昔の食類なり又薄鮑とも云り江次
第忌火御飯の御菜四種薄鮑干鯛鰯鰺ともに見えり今壽加賀の
席よ掛或ハかざりの〜なぐくもて用ひること足利將軍義滿
の下知ともて今川左京大夫氏頼小笠原兵庫助長秀伊勢武
藏守滿忠等よ一天下の武家と十一位よかち御一旗へ大名守獲
外様評定等の諸礼よ附て行ぐせらるる事三義一統よ成
えたり往昔ハ天智帝の大掌會よ干鮑の御饌ひく延喜式諸祭
の神供ともに悉く加へらる第一伊勢国ハ本朝の神都ともて鎮座ま
多〜故よ伊勢ぬよ制もる所謂又い飾物よいひらび〜て食類たるを

もちゐ〜尚鎌倉の代前後まで〜常よ用て專食類とせ〜其證ハ
平治物語頼朝遠流の条よ
○佐殿ハいひ〜この國建部明神の御前よ通夜〜て行路の祈ともやさ
んと為り治ひる夜人ちづまりて御供の盛安ヤ〜ふい都ぐて御
出家の事ぬ〜ぬからさるるこ〜やいひ〜い不思儀の霊夢と蒙ぐろ
し故なり君御淺衣よて八幡へ御參りて大床よ左ぐ盛安御供ぐて
ひるこの石ぬの上よ伺公ちぐりしよ十二三許の童子の弓箭を抱
きて大床よ立せ治ひ義朝ぬ弓箭ぬて糸ぐとりて〜ぬ御寶
殿の内ぐりけるかき御聲ぐてふぐ納ぬ花け終ぐは頼朝ぬ治い
んどるぐ是頼朝よ喰ぐせ〜と伝らるぬ天童物を持て御前よれ
かせ後ぐよ何ヤ〜んと見奉れば打鮑とらぐ物ぐり中略それたぐ〜と
伝らふぐ〜く御覽せ〜かバ六十六本ひるとかの打鮑を両方の
手よおぐ〜にぎりてふと引ぬ三口まいりちいさく処を盛安ぐな

けこせ終ひ〜を懐中するとなぐいひ〜いと云く　下畧

式文義時令麗〜又今西國の方ようう烏賊の〜海老乃〜或ハ生海鼠

の〜ゑのと出せう至て薄く剥て其様浄潔うして且真ひう

○毎年六月朔日志摩國嵜村ようう両大神宮へ長鰒弐獻ゞ故ゑ其地ゑ

ノシサキ共云てう又サヽヱサキ共云てう今榮螺うして作る事なり是延喜

式ゑ御厨鰒と見てうう又毎年正月東武へ獻上の料ハ長三尺八余巾一寸余

其余數品ひう

○真珠　漢名　李藏珍

是ハアコヤ貝の珠なり即伊勢うて取アて伊勢真珠と云て上品とし

尾張と下品とゝ肥前大村ようう出ゝ上品とはなれども藥肆の交易ゑ

ハひぐうゝゝアコヤ貝ハ一名袖貝といひて形袖ゑ似うう和歌浦うて胡蝶貝

と云大さ一寸五分二寸ぐうう殿色うて微黒ゝ帯たるもあるなう内白

色すして青ゝ有光ひうて厚〜殊ゑでも貝毎ゑあるにひらゝゝ珠ハ伊

勢の物形円く微〜青ゝゝ帯ゑ又圓からゝゝ長くして緑色弦帯ふ

ふとの石決明の珠ようう藥肆ゑ是ゝ貝の珠と云尾張ハ形正圓か

らゝゝ色鈍くて光耀ようゝ乏小なうう是ハ蛤蜊淦菜等の珠なう

形かくのごゝ

附記

弐云あこやといふハ所の名うして尾張の國知多郡ゑひう又

奥州ゑも同名あう又新猿樂記ゑハ阿久夜玉と見も萬葉集乃

鰒玉と六帖ゑあこやゑと歎せう又近江國かゝハと云貝ようう

多く取得るゝいて貽貝の珠ハ前ゑ云尾張真珠なう又西行山

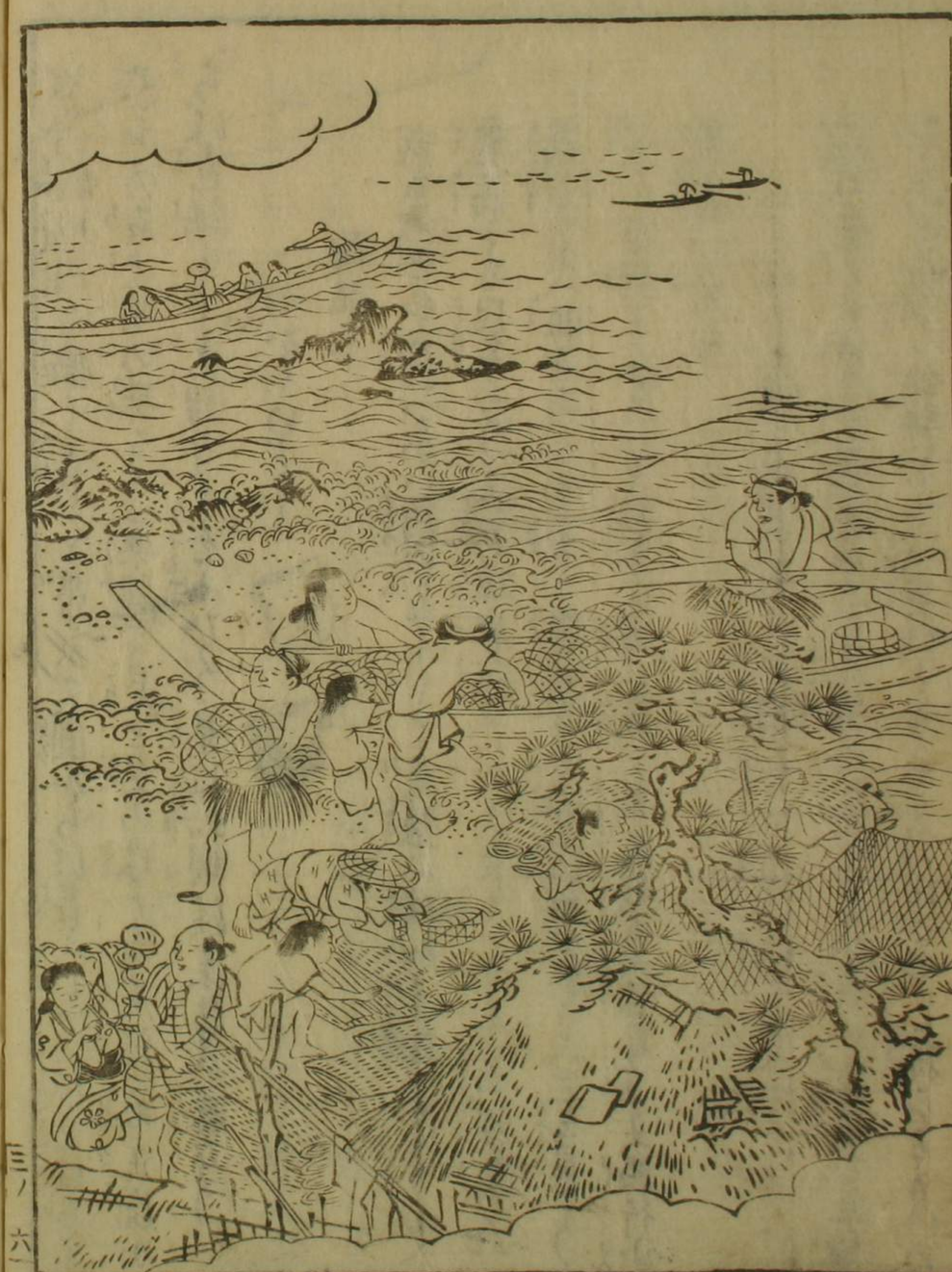
家集の云うゑ

あこやとふいうひのかゝと積て宝の沿とゝるこそう

右の歌ゝと見るゑあこやと尾張の所名とせゝ真の真珠ハ尾張

なるゝゝ弐今伊勢うて式貝弦とうて名ハひこやと称するのハ

長鮑制



昔尾張よ多くさ貝の今伊勢よのみ有るとは見くそり考へ
なるべく六帖鰕玉西行ゑの貽貝もよたこやといひ〳〵むらし
あこやよいろ〳〵の貝より多く丸珠をとりし故よ混〳〵て惣称
とあこやとはいひ〳〵なるべし

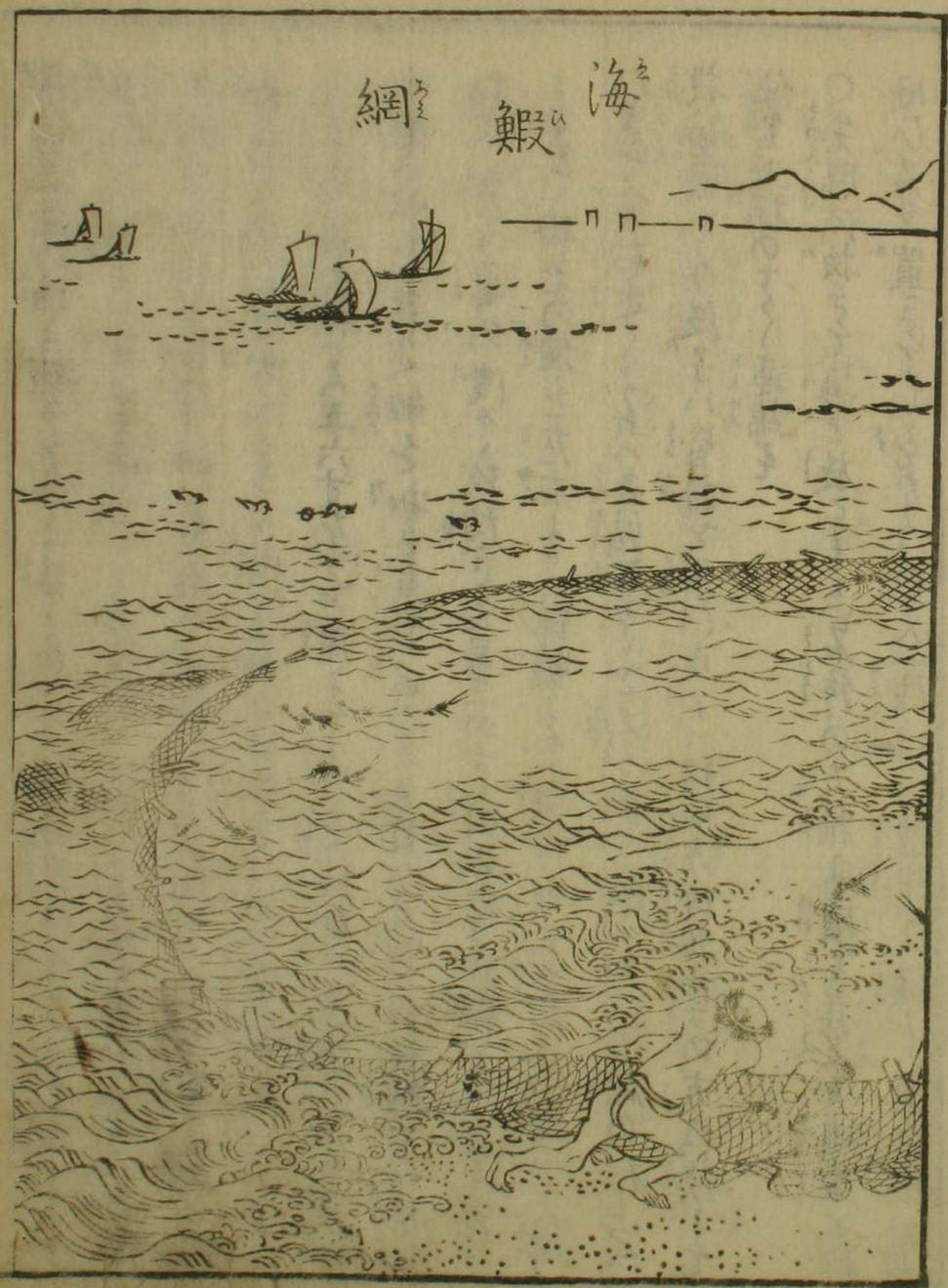
○海鰕

漢名 蝦鮮 和名 紅鰕 エビは惣名ゑう種類凡卅余種其中ニ漢名龍鰕とゐゑ海鰕なり

俗称伊勢海鰕と云是伊勢よりゑ京師へ送る故よ云なり又藻倉ゑう
江戸よ送ゑ故よ江戸にてゑ藻倉鰕と云又志摩ゑう尾張へ送る
故よ尾張にてゑ志摩鰕と云又伊勢鰕の中よ五色なる物有甚奇
品なり鬚白く背ハ碧重のごとゑの幅輪緑色其他黄赤黒相雑
○漁網ハ大抵七十尋深さ二間半但〳〵磯の廣さ岩間の廣狭よ
も隨ひて大小ゑり向と左右と三方の目ハゐら〳〵向ふ乃深さ十丈弱

許の目ハ細く〳〵て是ハ袋とゐゑ アバ 網子と用 重石 陶瓶と用 大抵鯛網
よ似ゑり日暮よゐれと張て翌朝曳くよ鰕悉く網の目どこゝて
かゝゑ是ハ後よ逐ゐ物なれゑ尾の方ゑりさせゑと又網の外ゑりかゝゑ
○鰕の腸脳よ属〳〵て其子脳の外よ左ゑ眼紫黒ゑ〳〵て前よ黄
なゐ所ゐり突出て疣子のごとゑ〳〵ハよ鬚四つゐて二つの鬚ハ長さ一
二尺手足ハ節ゐりて蘆の筍ゐごとゑ〳〵殻ハ悉く硬さ甲のごとし
好色で踊ゐ是海中の蚤なり蚤亦惣身鰕よたゑゞ
○エビの訓義ハ柄鬚なり柄ハ枝なり胞といひ江と云も人の枝海乃
枝ゑり蝦夷と五ヒシとゐゑハ是毛人島ゐゑよなゑと正月幸盤よ用
ゐゑハ海老の文字を充〳〵たるなるべし

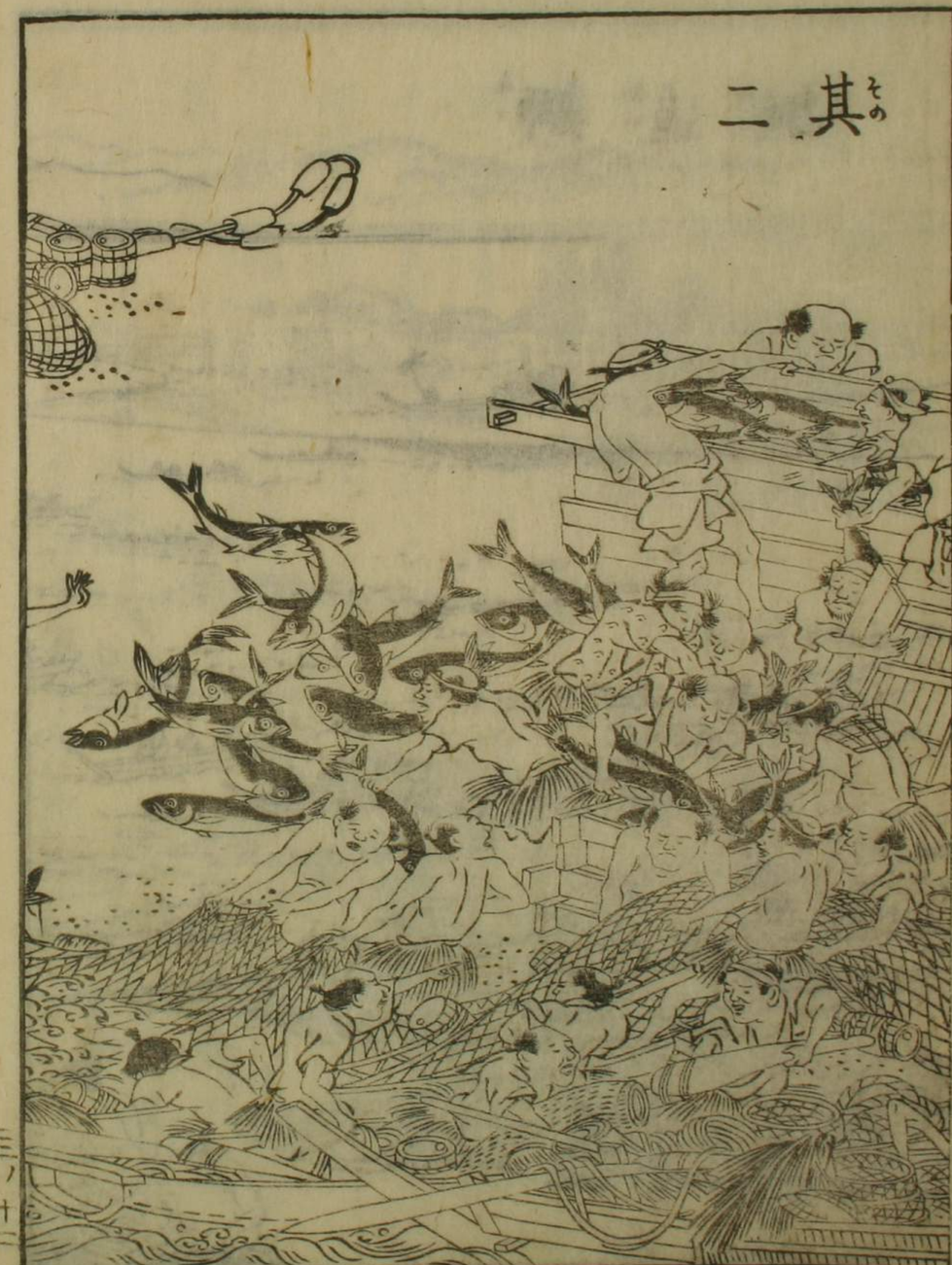
○鯽


海
鰕
網

丹後與謝の海より捕るその上品とし是ハ試海門より イ子と云所あり て
椎の本甚多く其實海へ入く魚の餌とし故に美味なりといつり○北に
天乃橋立南に宮津西ハ喜瀬戸是與謝の入海なり魚常に此に遊
長ずるに及んで出んとする時を窺ひ追網をはこれを捕ふ
○追網ハ目大抵一尺五六寸なるを縄にて作て入海の口に張るなり尚數
十艘の船を並らべ舳を扣き魚を追入る又目八寸許の縄網を二重に
れ張りて魚の洩るく様防ぎ又目三四寸許の苧網を三重にたろ
くさて初め網を左右より轆轤にて引けば三重の苧網ハ共に操
ひさて袋破近くなれば魚踊群るを大なる杓溢にかけて破の砂上へ
投げるなり泛子ハ皆桶を用ひ重石ハ縄の方焼物苧の方は浜にて
他に土桶のとく連綿を
○先腸抜きて塩を旋こくに石許の大桶に漬て其上に塩俵をれ
ほひ石を置きておくなり○又一法塩を腹中に満くに土中より

埋こ進と使せて水氣を去て取出して再び塩俵施こく蔦に裏
ゝても出せり市場ハ宮津にうて是より網場の海上に迎へて積
歸るなり
○他國の鰤網　九手段かくることなくいたるも沖網にて竪網に
細物にて深さ七尋より十四五尋許尚海の淺深に任て網の目を
冬より正月下旬まで七寸許と二三月より五六寸を用ひ漁
船一艘に乗人五人に四人ハ網を操げ一人ハ艪櫓取る泛子ハ桶に
て重石ハ砥石のごとく網に置くにはは湖中の魚鹿のごとく引
廻く魚の後に退くを防こかくて海近きに遠目鏡を構へ魚
の集る様倒ひ見るとき海浪光耀ありて水一段高く見へ魚一
尾踊る時ハかるらに千尾なりうと思ふ麾を振て船に示を是を
辻見又村ごんと又魚見ともに云海上に待うけ二艘の船にうて
其麾の進退左右に随ひ二方に別まて網をたろくに漕廻ハる

網追鰊

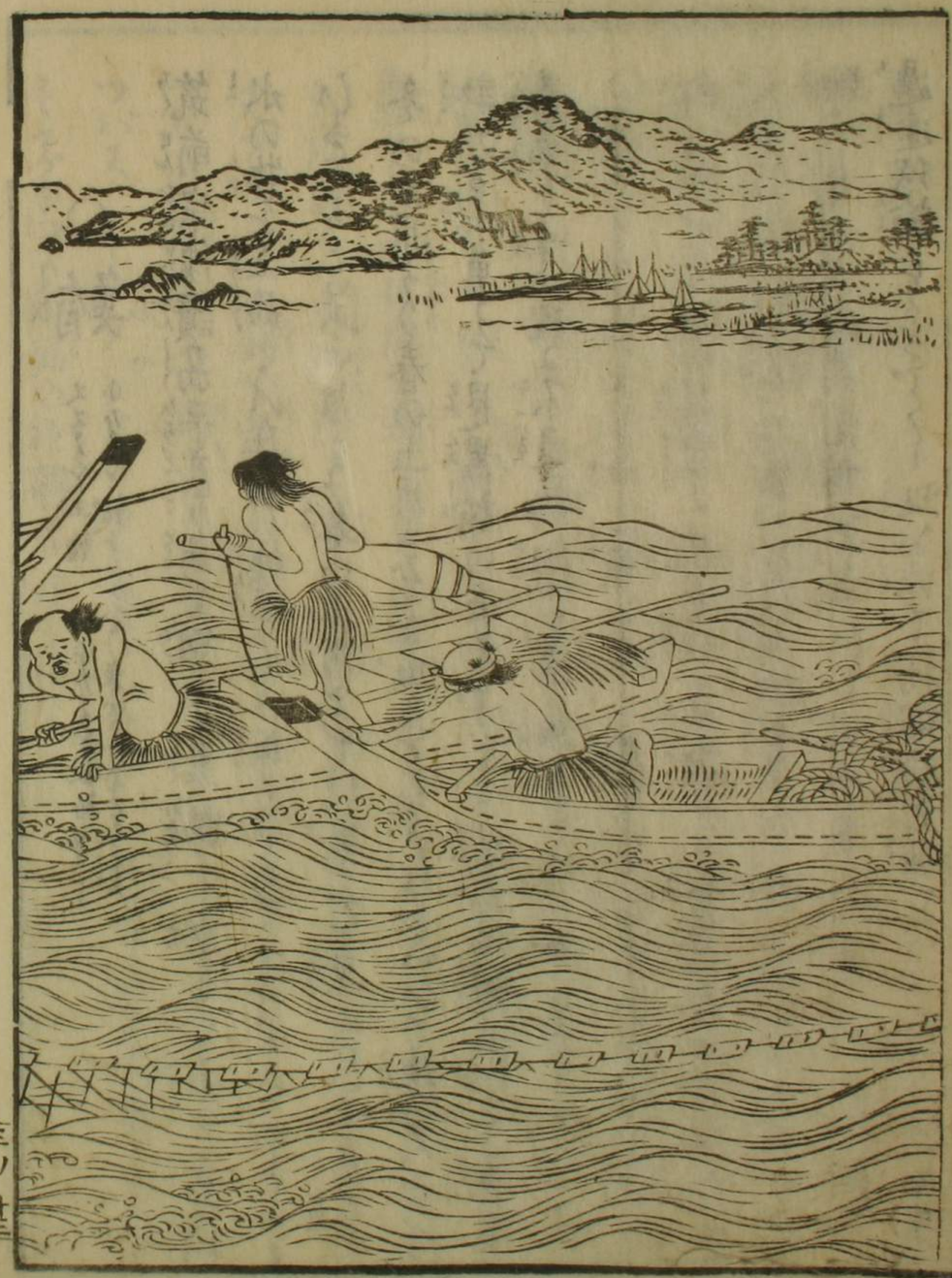

其二

事二里許も及びひさごよい轆轤手操なと國ぐの方術
大ハ小異ゝして畧相似そう
○或云鰤ハ連行て東北の大浪を経く西南の海と続て丹後の海
上ゝ至る比ゝ魚肥脂多く味甚甘美なり故ゝ名産とゝと云
○鰤ハ日本の俗字なり本草綱目ゝ魚師といふハ老魚又大魚乃
惣稱なれど其形を不釋或ハ云海魚の事ゝ於て中華ゝ数く取
皆甚粗なり是は大國ゝして海ゝ遠さゞ故ゝ其物得て見る事
難りれど唯傳聞の端をのゝ記せ〳〵と多〳〵されども日本ゝて鰤乃
字ハ制〳〵即魚師と二合〳〵て大ゝ老たるの義ゝ充てるゝ似う
又ブリといふ訓も老魚の意を以く年経たるのフリゝうて
フリの魚といふと濁音ゝ云習ハせるなるべ〳〵○小なる鰤 ワカナゴ
ツバス イナダ メジロ フクラギ ハマチ 九州〳〵て大魚とも称
するゝ由てゝ始の祝詞ゝ脅る物ならし

○鮪 大なるを王鮪 小なるを鮪子とゝ 中なるを叔鮪 俗ニメクロトヱ 東ゝて云

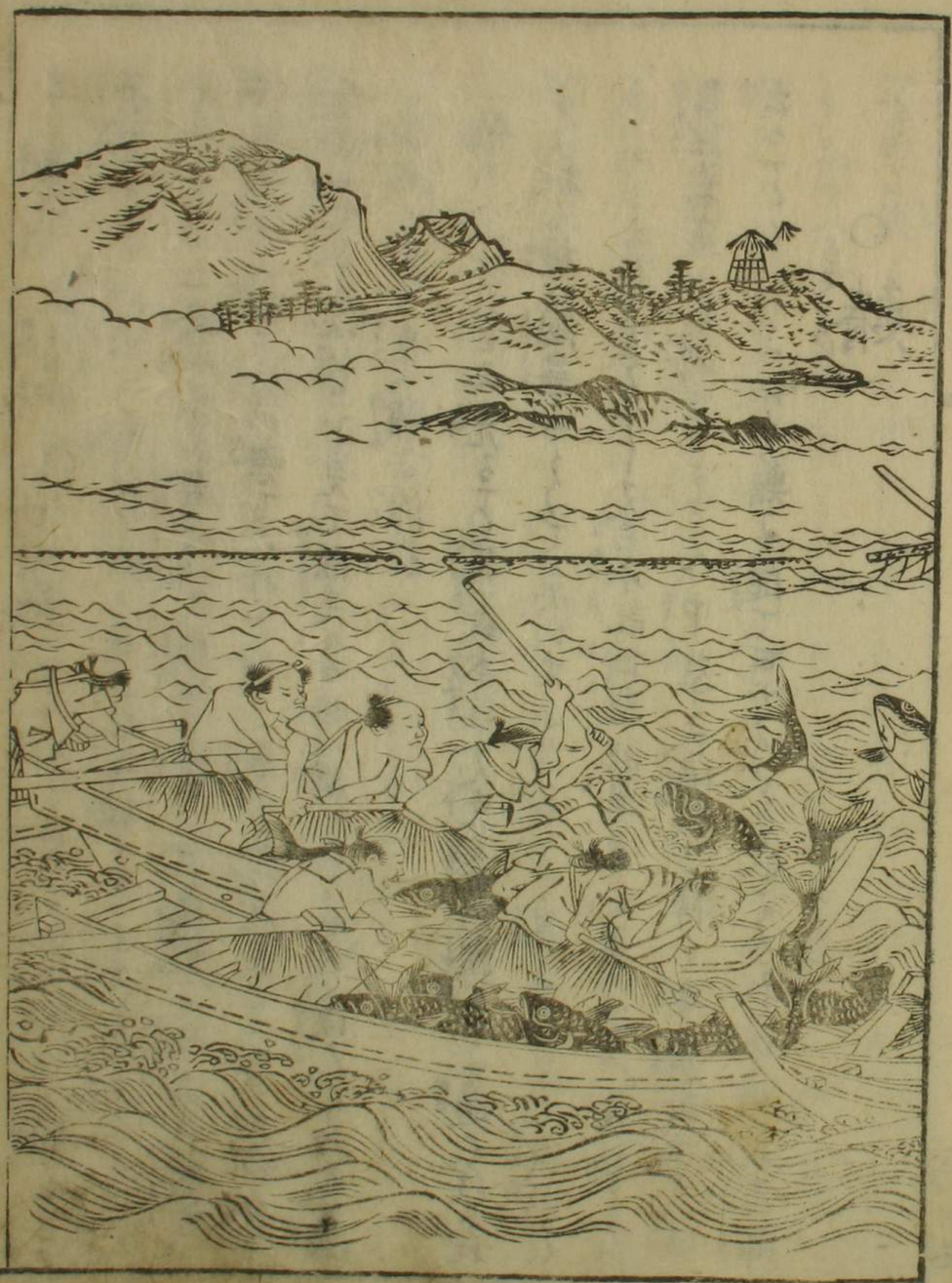
筑前宗像讃岐平戸五島ゝ網を張る事夥し中ゝも平戸岩清
水の物を上品とゝ凡八月彼岸ゝ取そめて十月まで其のを
ひきながといふ十月ゝ冬の土用まで取ふを黒といひて是大と
冬の土用ゝ春の土用まで取るをくらといひて絶ず二三す
許なる小魚ゝて是黒鮪の去年子なり皆肉は鰹ゝ似く色ゝ
甚赤し味ハ鱈ゝ不遠凡一網ゝ獲る物多さ時ハ五七萬ゝも及ぶ
○是ハツノミと云ハ市中ゝ家〳〵て一尾を買者なれハ肉を割て
秤ゝかけて大小其需ゝ應ぜ故ゝ他國ゝも大魚の身切と唱ふ
又是をハつと名付る事ハ昔氏肉ハ賞〳〵て絶ゝ取そめ〳〵とゆ
馳て募るゝ人其先鉾と爭ひて求る事今東武ゝ初鰹乃
遲速ハ論ぜるゝ〳〵此を以て初網の先馳をハつこハいひそう

網立鰤



後世式味の美癖を悪んで終よふふされ貶物よ陷アて食傳
の庖厨よ加ふることなくされども今も貶夫の爲よハ珍の一つよ
擬てさらに孫賞を ○式魚のふるを干て干鱁のこせるの
美葉集
鮪にくとあゆのもせうふ鮫さう火のかよハ出るん我下ゑひを
○礼記月令よ季春天子鮪と寢廟よ薦むと、ケれども鮪の字よ
論ケうて今のハつとは定めがそく尚下よ辨に
○網ハ 目ハす許すて大抵二十町許細き縄ゑて制を底ケアて
其形箕のごく尻よ袋ケう縄ハ大指ようふくくして常よ海
底よ沉免置き網の両端よ船二艘宛付て魚の群輻を待なり若
集る事の遅き時ハ二月乃至三月ともて網を守アて徒よるせ
アと是亦山頂よ魚見の櫓ケうて其内よう伺候ひ魚の群集何萬
何千の數をも見さぐろ麾とお振アてかはいろくと吠えふ
カてイロ以は 其時ダンベイといふ小船三艘出一艘よ三人宛腰蓑褌
構へよるの軟と

鉢巻ゑて丸ごくに漕ふせ網の底よをと掛てう事ゑまに
及べど又山頂ケう麾を振ふよにひて數多のダンベイおうせく
惣かアよひきあげ網舟近くせまれど魚浮騰ーて涌ごとし
漁子熊手鳶口のごとき物ゑて魚の頭よ打付ゑば弥驚ざてたのに
から船中よ踊アと入ケう入盡さぬれば網ハ又えのごくに沉免置て
船のこ漕退こ尻よ付そる袋よハ鰯二艘ごろも満ぬまども他魚
よハ目とかくはそるく是ハ久くく沉没せう網なれど若むく
たろを我巣のごくよなくて居ケうとぞ尚図よ照らくて見ゑ
○又一法よ釣アても捕るなケう是若劦の術ゑて其針三すごろう
苧縄長百間針ようう一間程ハ又苧にて巻くこ是猟鼠尾といふ餌を
鱁の腸を用ゆ糸は捅へたごりて竿に付るこるく
○式魚頭大ケうて嘴尖り鼻長く口領の下よあり頰腮鋏兜の



鮪冬網

さく頰の下より青斑いり死後眼より血を出て脊より刺髦亂り鱗るし
蒼黑ようして肚白く雲母の如く尾より岐有硬して上大より下小なり大
なるもの二三丈小なるふ者七八尺肉肥て厚く氏魚頭より力あり頭陸と
向ひ尾海より向ふ時ハ懸てこれを採て易し是尾より力なきゆへ
燒より柔ぶて浸び日と見て眩来る時ハ群をなせり漁人これを捕
て脂油を采り或ハ脯より作ふ

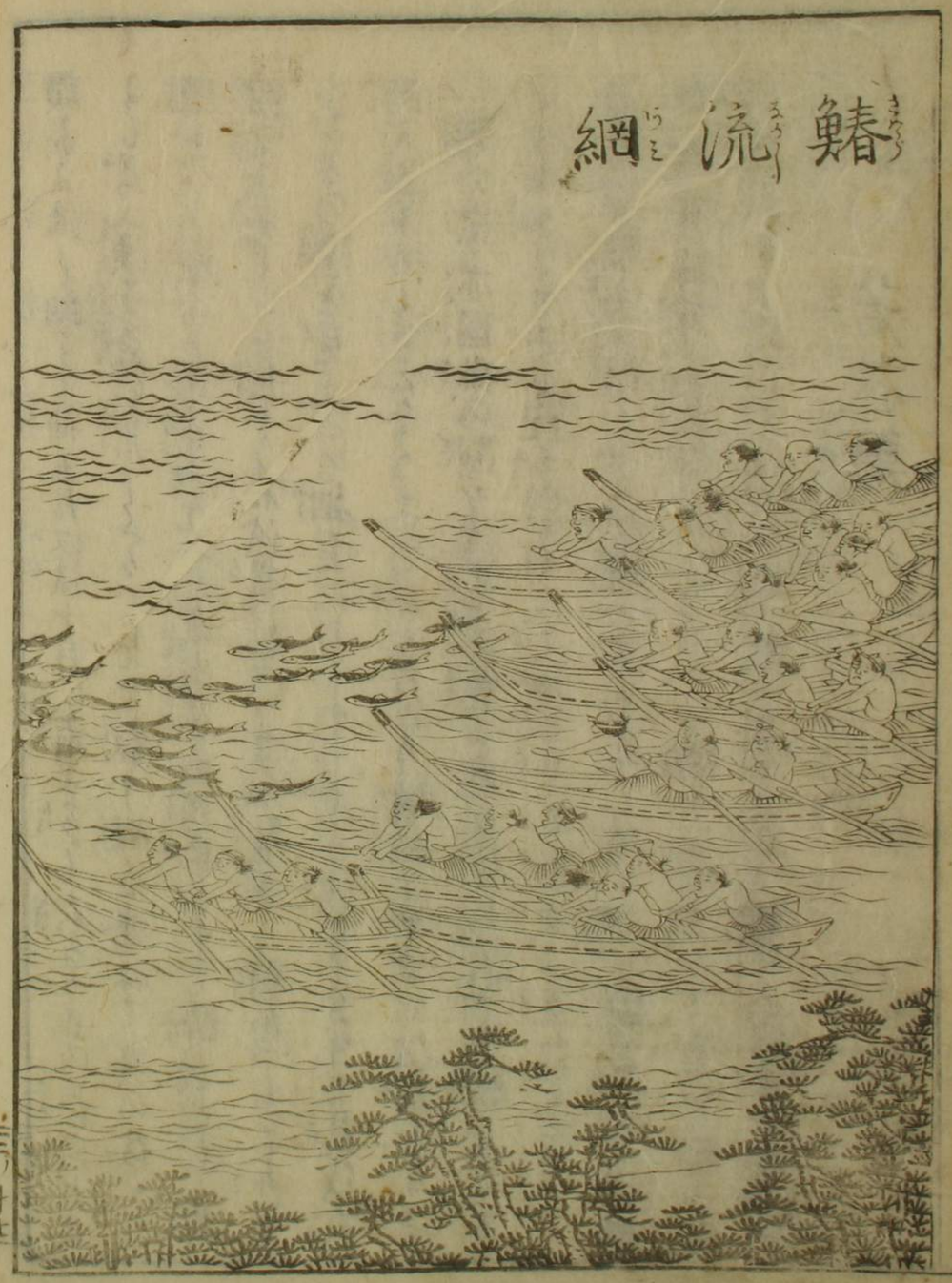
○鮪の字をシビと充るゝ其義本草又字書の釈義より適ゝ
ども和名抄ハ風書よりうて奥の大小乃名とも異ようゝ其故な
きようしも、ゆゝざるべし又日本記武烈記真鳥大臣の男ハ名鮪と云て
自注巻葉とも訓せうえうう中華ハ海物と釋く事甚粗成ゆ既に
云ゞゝ故ハ姑く鮪ハ隨て可なりともいとんシビの訓義未詳

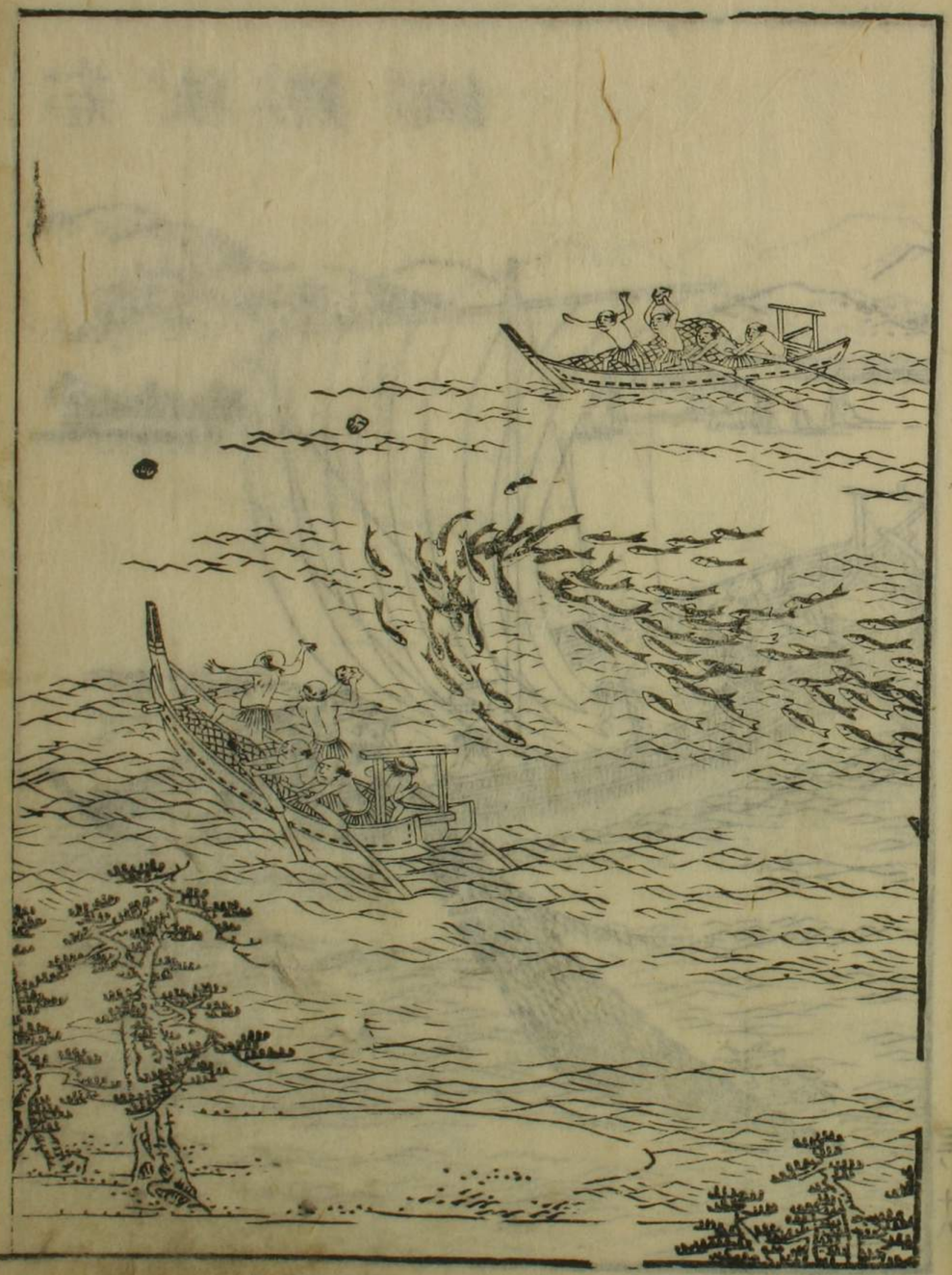
○鰆

讃岐より流し網にて捕五月以後十月以前より多し大るものの長六七尺
より及ふ漁子魚の集ようと見て數十艘を連ねて奥の後より
漕まハり追ふこの甚しくられ魚衆勞也馮虛として酔ゞゝ其
時先より進ようる舟より石紙投けていよゝ驚ゝ引かゝして逃ん
ようるの期を見さゞる網をたゝして一尾も洩ようなゝ是殘大
網又ちぶるゝも云なりさて網をたゝう攬網ようてさゝひ取るなり
○鰆の字亦國俗の制なりう左字書より春魚とのれども繪より二三寸
計の微魚ようてさらに充べゝらゞ大和本草馬鮫魚より充たる日魚大
なれども肢小より狹ゝ故より狹肢と号くサイ狹ゝなり圖書曰青班色
無鱗有歯其小者謂青箭云く○氏子甚大ようり是を乾ゝ
たるをカラスミといゝり昂乾ゝるを云但ゝ鰡なるの乾るハ是より劣る

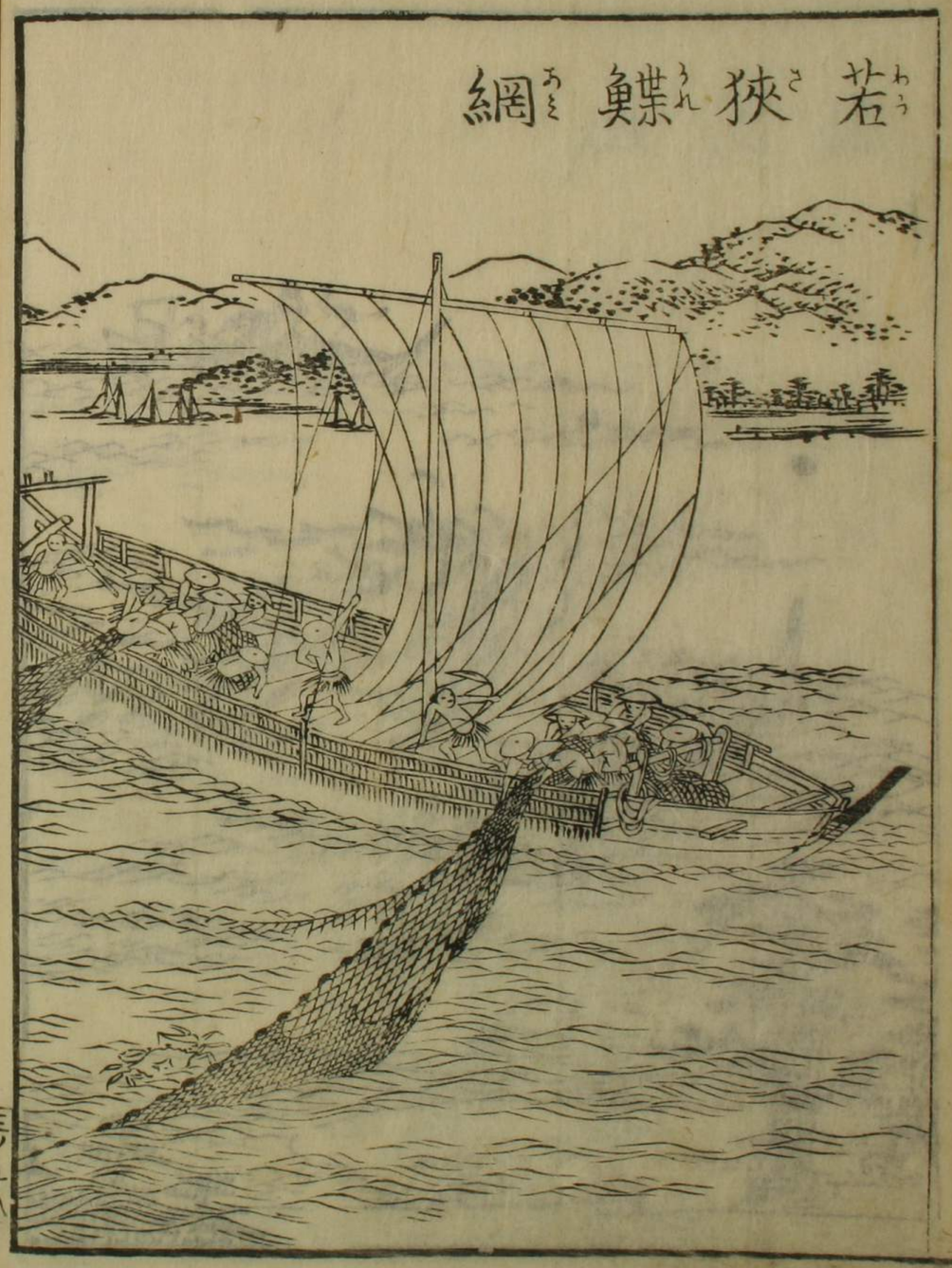
○若狹鰈

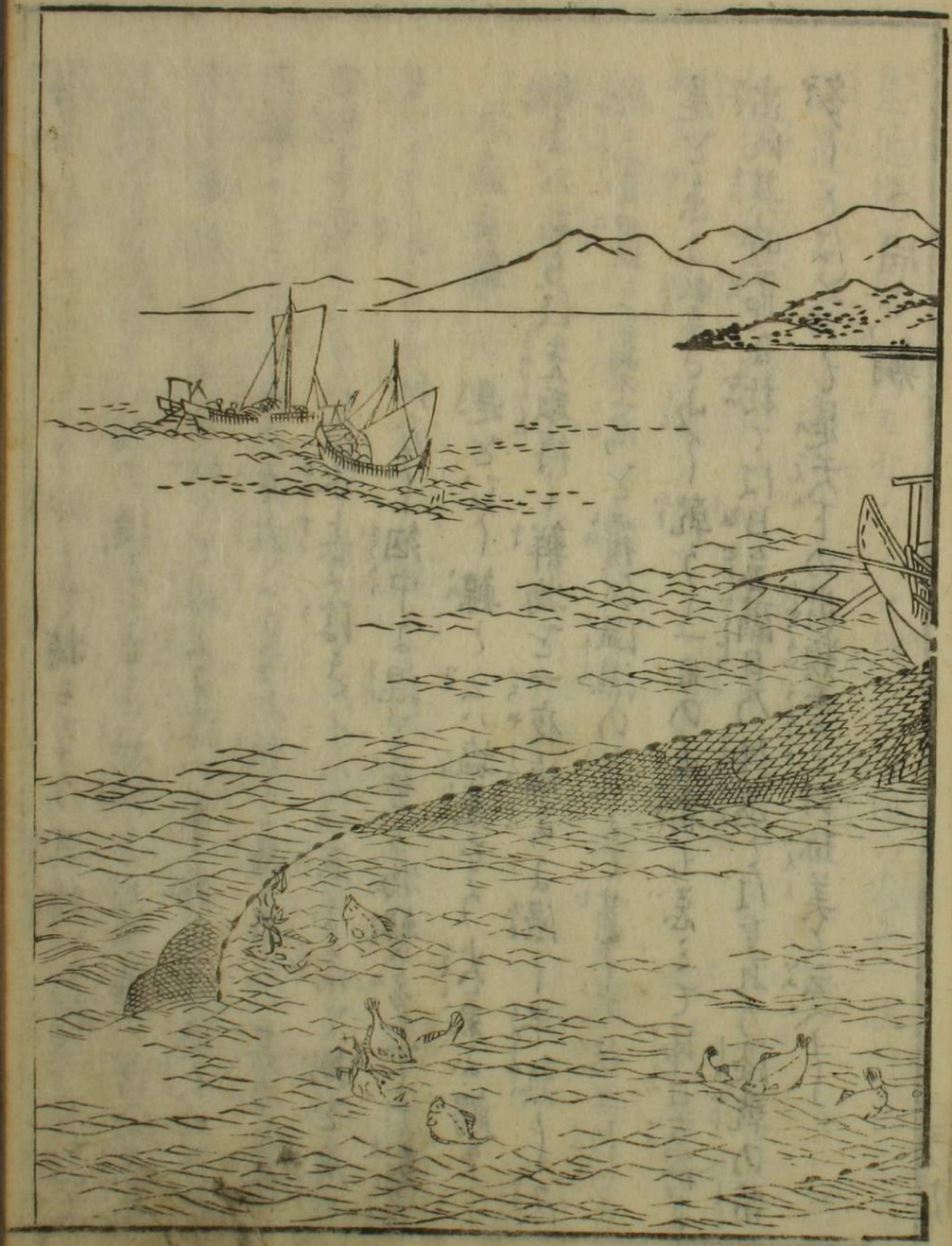
鰆流網





若狭鰈網





海岸より卅里ばかり沖にて捕るなり其所を鰈場といひて
若狭越前敦賀三國の漁人どもは操網を用ひ海の深さ大抵
五十尋鰈は其底に住て水上に浮む事稀なり漁人卅石計
乃船に十二三人舟の左右にかゝれ帆を横にかけ其力を借り
て網を引なりアバは水上に浮きイハは底に落て網を廣め
るなり網は細なる網中に混雑る物蟹多くて左に
○塩蔵風乾　是をむしり鰈と云ハ塩蒸なり火氣に觸さし
物はいたらぬ先取得し鮮物を一夜塩あに浸し半熟して又
砂上に置き藁蔫を覆ひ温湿の気にて蒸して後二枝づく
尾と糸に繋ぎ干し乾すこと一日の止宿も忘て昂日京所に
出て其時帛に於ては日毎蔭日乃往還とはなれり淡乾の品
多くとはいへども是天下の出類雲上の珍美と云べし

○同小鯛

是延縄を以て釣るなり又せ縄とも云縄の太さ一握許長さ一里
許是に一尺許の苧糸に針を附け一尋くを隔てく縄に列
ね附て両端に樽の浮子を括り差頃にしてかの浮子と日當
引なぐるに百糸百尾を得て一も空しき物なし餌ハ鰺鯖鰤等
なり同じく淡乾ともするに其味亦鰈に勝る○鱈を取るも
此法を用ひしことなるべしまことに小鯛と云

○他乃鯛網

畿内以佳品とする物明石鯛淡路鯛なりされども讃岐摂股に
捕る事鬱〻是等皆手操網を用ひ海中巖石多きにて
はぶりといふものを追て使所に湊むぶりとは薄板に糸をはけ
長き縄に多く列らぬ付け網を置くぐ如くひき廻されぶり
ハ水中に運転して木の葉の散乱るぐ如きされども奥是に
鬱されて中流に湛浮ひぶりの中真に集るなり此

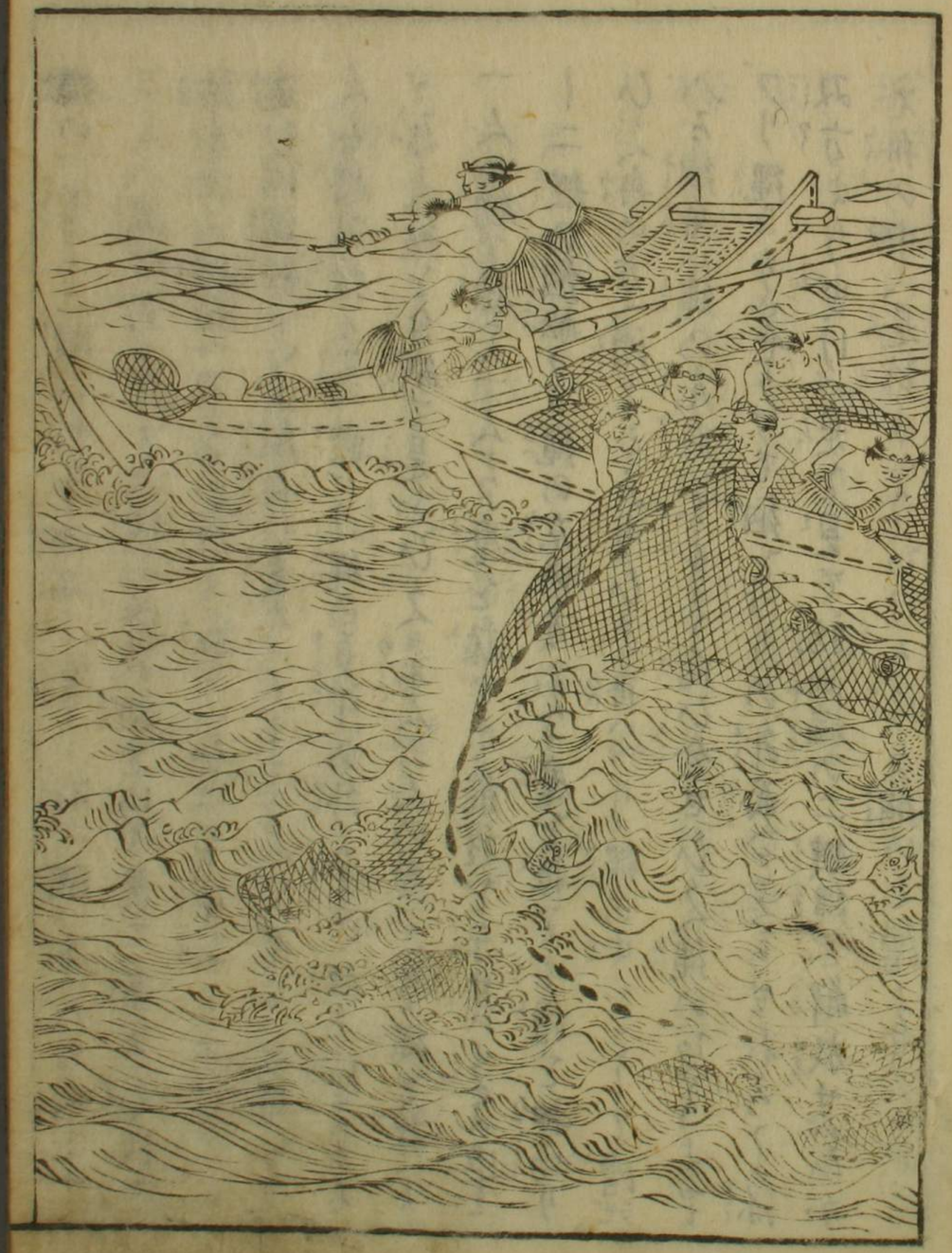
若狭蒸鰈制

讃刄榎股

鯛擄

網之

次第



鯛五智網

縄の一方より三艘の船を両端より繫く初二艘ハ桑人三人ゟて
二人ハ縄を引き一人ハ樫の棒或槌を以て鼓て奥の分散を
防ぐ此三艘の一つをかけら舡といひ二を中船と云ひ先より
進む扨網船といふ網舟ハ桑人八人ゟて一人は麾を振て七
人を艪扨採る又一艘ブリ縄の真中の外より立て縄の沉まざる
ゟる又縄を付副て是をひく桑人三人の内一人ゟ縄を採て
一人ハ艪を採て一人ゟ麾を振て能程と示せば先より進て
一二艘の網船ブリ縄の左の方より麾を振て櫓を押切り
ひく舟の方へ漕よゟれぞひく舟ハつり縄の中をさして漕込
入る網舟ハ縄の左右へ分ゟ向ひ合せひく縄のけうよゟて
ブリ縄より〳〵せうけて網をブリの外面へとゞらせれろ〳〵泳
双方より曳けば是を見て初両端の二艘縄を解放せばひか
え舟の中へ是扨よゟ引げる扨ゟ網のゟ漕よゟ〳〵終て

網舟二艘の港板を遺ちゞて扨よゟ引ゟぼるゟ魚亦涌ら
ゞ〳〵踊て〳〵ゟ網を潜ゟて頭を出〳〵かゝゟる尾を震ひ
刃〳〵ゟて電光ゟ異なゝ扨漁子是を攫網をゟゟ〳〵小取
船へ羅ひゟ入て小取船桑人三人皆艪扨採て礒の方へ漕で
ゟゟふなりかゝゟて捕るをゞち網と云
右ブリ縄の長凡三百二十尋大網ハ十五尋深さ中ゟて八尋其
次四尋其次三尋なり上品の苧の至て細さを以て目ハ指七
さゟなりアバ引り泛子ゟ〳〵重石ハ竹の筒を似り其中へ石と
加へ糸にて結ひ付て鼓のちゞゞのゞゟ〳〵網を一重二重と
いひて何重も継合せて廣く扨其結繫ぐの早業一瞬とも
待たぞ一重とは幅四間ゟ下壱十間許なゝ
○蛇骨と号る物同國白濱ゟ多〳〵故ゟまゝ此ゞち網ゟ混じ
入りて得ると云〳〵

○比目魚とは鰈の惣名なり本草釈名鞋底魚と云ハワシタ又クツゾコと云て種類なり鰈の字これを適つり若狭蒸鰈のごとく大和本草ゑ悉しくこれを東國にてヒラメと云

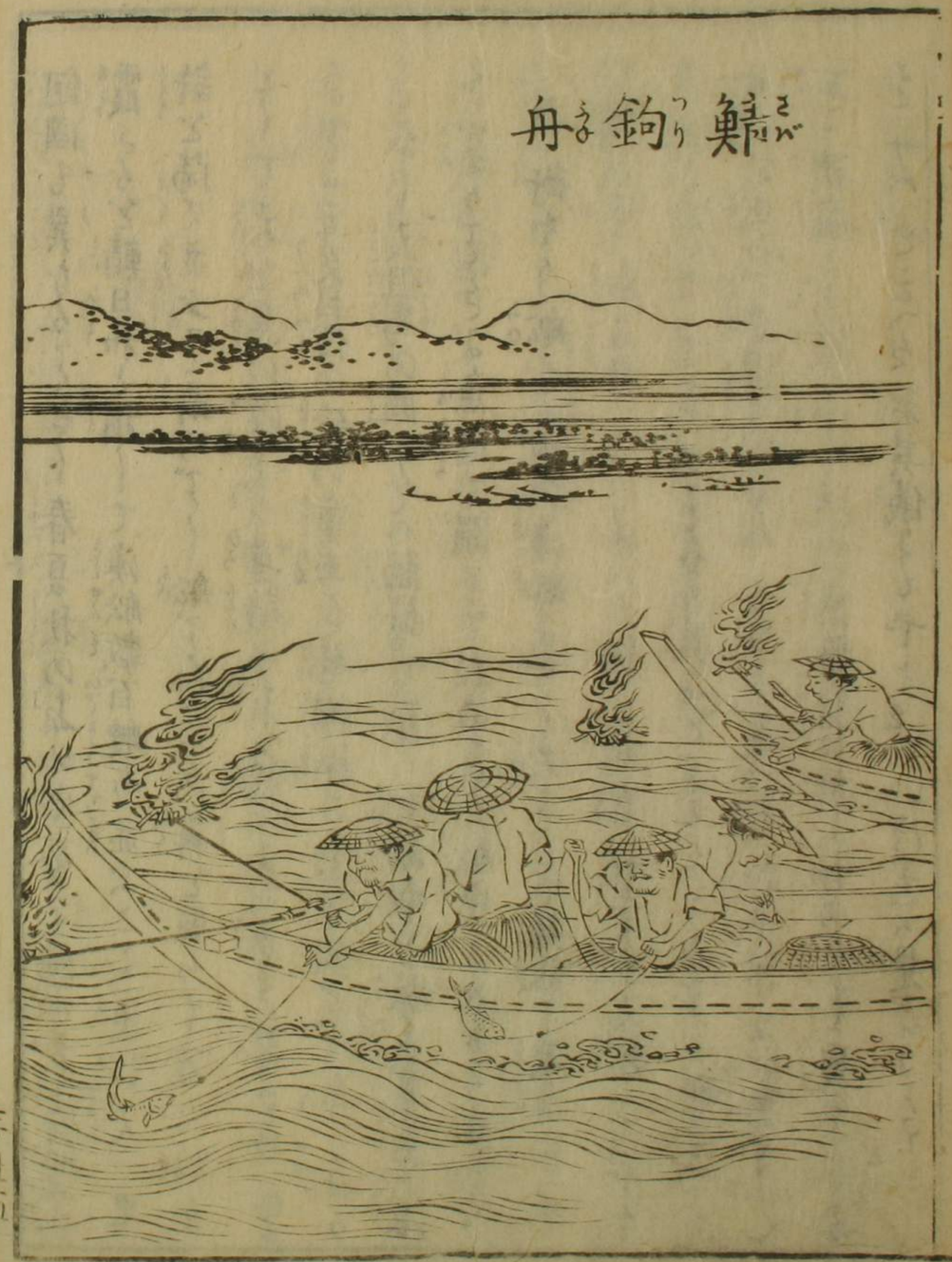
○鯛ハ本草ゑ載さる是亦大和本草ゑ悉し故ゑ畧す鯛の字は魚ゑ充てけく〳〵と久〳〵しいれども是棘鬣魚と正字なり神代巻ゑ赤目と云又延喜式ゑ平魚と書しハタヒノの意なり中にも若狭鯛ハハナヲレ又レンコといひて身小さくて薄き色淡黄ゑて是一種なりハナヲレの義未詳 他國の方言ゑへイケ又ヒウダヒとつゝもともに平魚の轉ゑるべし 萬葉九長歌

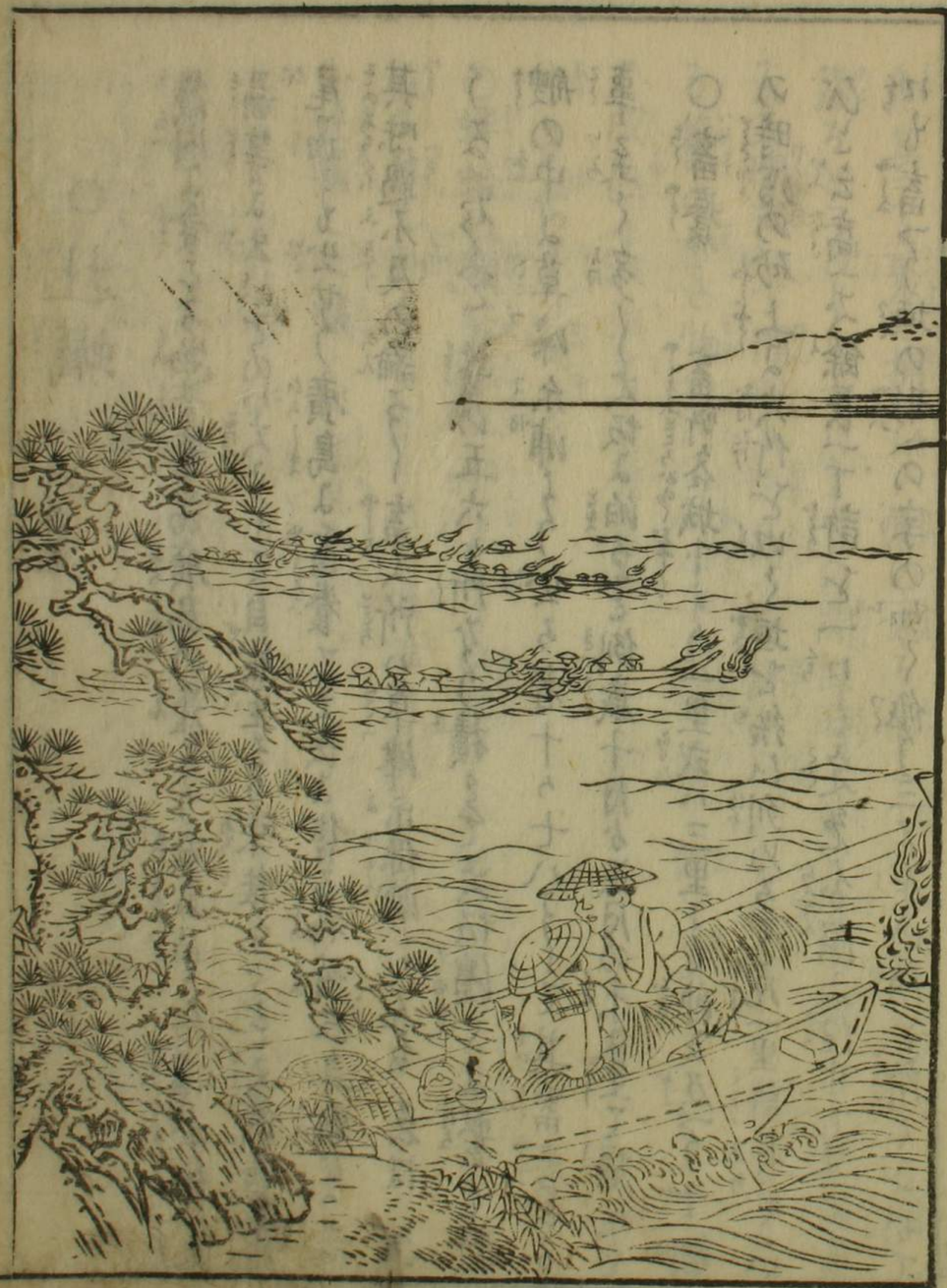
あれはの浦島子ぞ堅魚にはり鯛にはりかねて七日まで 重丸

○鯖

丹波但馬紀伊熊野ゑ出は甚不ら能登と名品とす釣捕ら法何國も異なることなし春夏秋の夜の定昌雲て湖水ゑ上て海上霞ゑを鯖日和と稱して漁船數百艘ゑ並ぶこと一里許又一里許と隔て並ぶと前のごし船ごとに二つの篝を照らし万物を〻として天を焦は漁子十尋許の糸を苧ゑて巻き琴の緒ゑと〻き物ゑ五文目位の鉛の重玉を付鰯鰯などを餌とし竿ゑ付ることなし又但馬の國にてハ釣針もなくはゝ松明と振ゑ其影波浪を穿ゑ魚隨て踊アて花のごと船中ゑ入きて是又一奇術なり船を常の漁船ゑおゝきゑして縁低し越前尚大し

○鰆の字和名抄ゑアラサバと訓ぜ本草ゑ青魚又鯖とかゝるカドといひてニシンのごとき其子をカズノコ又カトノコと云サハの正字未詳○サハとつゝ義ハ大和本草ゑ鰐魚牙小し尖ゑ狭歯と云狭ハ小し云く東雅云古語ゑ物の多く聚つもるをサバとこへぞ若其儀ともやとこくいはもこれ是なりとて紀は


鯖釣る舟



○牡蠣 一名石花

畿内より食とる物皆藝刄廣島の産とり玄名品し江播刄紀泉刄等より出るそのハ大き〳〵て自然生とり味佳なるゝと又武刄参及尾刄にも出せり廣島より畜養て大坂より售る物皆三年物なり故其味過不及の論なし畜ハ所ハ草津示保浦 たんな 忘はひうな わくこ 等の五六ヶ所なり積て大坂濱くゝより繫ぐ數艘の中より草津示浦より出る者十ヵ七八なりて其畜養とる事至て多し大坂より泊ると例歳十月分正月の末より至て帰帆を

○畜養

畜所各城下より一里或ハ三里も沖より及び干潮の時泻の砂上より大竹を以て垣を結ひ列ぬると凡一里許ずつ ひ びとゝ云高一丈餘長一丁許を一にし定免分限より仕せて其数幾にも畜て垣の形への字の如く似て三丈余の隙を所々に明て

魚其内に取を捕こひゝ潮の来る毎に小き牡蠣又海苔の付て殘ると二月より十月まゝの間は時〻是を備中鍬にて掻落し又五間或ハ十間四方許高一丈許の囲しく竹垣にて結廻し た る簗の如き物の内の砂中一丈許堀て埋て畜ふと三年より て成熟と云海苔ハ廣島海苔とて賞〻色〻の貝もとりて中にもたくさん貝多し

○蚌蛤の類皆胎生卵生なり貝物にて惟化生の自然物なり石に付て動くことなくれど雌雄の道なし皆牡なりとゝ云故に牡蠣と云蠣とは其貝の粗大なるを云石に付て磯にたくさんあつて房のごとくを呼んで蠣房とゝ云初免生るときハ唯一拳ばかりのごとく四面漸く長じて一二丈に至る物も有なり一房毎に内に肉一塊ありて大房の肉ハ馬蹄のごとく小きハ人の指面のごとく潮来るごと諸房皆口を開き小蟲の入るとれど合せて脇に充るとゝ云

廣島牡蠣畜養之法

又曰礒よりて石よ付て多く重て山のごとくなるを蠔山と云
離をて小るを梅花蠣と云廣島の物是なり筑前にて是ゑ
ウ
ヂ貝といふ内海の礒よりてなり又オキ貝コロビ貝と云
石よ付ぶ離をてあるを云へり○又ナミてカシハと云へり海
濱よ多く形円まるて薄く小ろうかい赤ふ〜て小刺ありぶ美
なり好事の者ハ多く賜へ玩ぶよ備ふ是韓保昇が說く所
蠣蠣是なり歌書よスてカシハとらふは蠣殼の事なり又仙人と
云へり其殼よ付く刺幅廣きを云又刺の長く一寸許よ多く
附く物を海菊と云又むら雲のごとく刺なきものもあり其
色數種なり　右本草并諸房の說を採る
○カキとよふ訓ハカケの轉じたるなるべし　吉熟よ
ようの〜岩のうけ及ふをなるし　とよめ名ハいま
俗よ岳と云よ同〜て云訓〜よや物の闕をるを云も
其意よてともよ方圓の全からざる義なり
○武殼とやきて厝とる〜壁を塗ること本草よ見へたり
○大和本草よ高山の大石よ蠣殼の付たるを論〜て參ふるこれ
又本草よ云所ふて千山老人の討論ありいぶれを是ふると
も知らざれぶ此よ畧をさんれども天地一元の壽數改変の時よ付
きる殼なりと云もいまり迂遠なる說と

日本山海名産圖會卷之三　終